患者と死別した造血細胞移植同胞ドナーの語り

浅野悠佳¹, 柳原清子²¹広島大学病院看護部²金沢大学医薬保健研究域保健学系

本研究は、患者と死別した同胞間造血細胞移植ドナーの語りをライフストーリー法で明らかにし、同胞ドナーの心理的特徴が家族に与える影響を家族システム理論の観点から分析した。A氏（30歳代、男性）は急性白血病の姉に細胞を提供した。移植の過程において姉弟に上下関係が意識され、喧嘩になった事は、両親の感情にも影響を与えた。B氏（40歳代、男性）は急性白血病の兄に細胞を提供した。B氏にとって兄とHLA型が一致したことは、わが子が白血病になる不安を感じることに繋がった。C氏（60歳代、女性）は4姉妹の末子であり、悪性リンパ腫である長女に細胞を提供した。姉妹の良い関係を維持したいC氏は、4姉妹の中で自分がドナーになることが自然であると繰り返し語った。姉妹の良い関係は患者の死後も変わらなかった。同胞間造血細胞移植ドナーおよび家族には長期的な影響があることから、継続した支援が必要であることが示唆された。（日本造血細胞移植学会誌 8(2): 90-96, 2019.）

緒言

造血細胞移植において、ドナー選択の重要な条件はヒト白血球抗原（HLA）型である。患者の同胞はドナーの第一候補となり、日本で1991年から行われた造血細胞移植のうち、同胞間造血細胞移植（以下、同胞間移植）は、全体の約40%を占める¹。一方、ドナーにはリスクがある。2012年に移植に用いる造血幹細胞の適切な提供の推進に関する法律が成立し、ドナーの健康保護のための措置を講じなければならないとされる。

同胞間造血細胞移植ドナー（以下、同胞ドナー）の看護に関する研究の多くは小児を対象にしている²⁻⁷。一方、成人の同胞ドナーが抱える問題については、同胞が病気である現状へのストレス、ドナーとなることへの義務感と不安があり、医療者のサポートが必要であることが指摘されている⁸。我が国の研究報告においても、ドナーが提供前に意思決定の複雑さを感じる言及がされている⁹⁻¹⁰。さらに、自分しか同胞の命を救えない責任を他の家族成員と共有できないことから、同胞ドナーは孤独を感じる¹¹、HLA型が一致した場合に、拒否が不可能であったケースが報告されている¹²。これらの問題が指摘されているが、患者と死別した同胞ドナーの語りを分析した研究はみられ

ず、問題点や、支援方法は明らかでない。造血細胞移植は5年生存率が52.4%であり、患者と死別した同胞ドナーの支援体制が整備されていないことは問題である¹³。

そこで、本研究は患者と死別した同胞ドナーのライフストーリーを家族システム理論によって分析する。家族システム理論では家族を一つのシステムと捉え、家族成員の変化は家族全体の変化となって現れるとされる。同胞は対人関係の一つの基盤をなすものであり、長い期間を一緒に生活するため、計り知れない影響を及ぼし合う。同胞間移植は、その関係性を変化させ得る事であり、家族全体にも影響を与える。家族システム理論の観点から見れば、この事が本来の家族機能に変化を与え、家族の危機を招く可能性がある。

目的

本研究の目的は、患者と死別した同胞間造血細胞移植ドナーの語りをライフストーリー法で分析し、同胞ドナーの心理的特徴が家族に与える影響を家族システム理論の観点から明らかにすることである。

Submitted April 23, 2018; Accepted January 15, 2019; Published online, April 15, 2019. (Handling Editor: Akihisa Sawada, Osaka Women's and Children's Hospital)

Key words: sibling donors, hematopoietic stem cell transplantation

Correspondence: Yuka Asano, Nursing Department, Hiroshima University Hospital, Kasumi 1-2-3, Minami-ku, Hiroshima, 734-8551, Japan. E-mail: yukaasa@hiroshima-u.ac.jp

dx.doi.org/10.7889/hct-18-005 © The Japan Society for Hematopoietic Cell Transplantation.

用語の定義

同胞ドナー：同種移植が必要な患者に、造血細胞を提供した患者の兄弟姉妹。

家族：家族とは、絆を共有し、情緒的な親密さによって互いに結びついた、しかも、家族であると自覚している、2人以上の成員¹⁴。

研究方法

1. 研究デザインと分析方法

本研究はライフストーリー法を用いた質的研究である。本研究におけるライフストーリー法は「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法」である¹⁵。

Benner, P.¹⁶は、「ある人が現実の経験をいかにうけとめるかは、その人が現在いかなる状況に身を置いているかによって規定されるだけでなく、過去に対する理解によっても規定される。そして過去と現在のこうした結びつきによって、未来に対する理解と構えが設定される。」と述べている。対象者の「現在」と「未来」を支援するためには、その人の「過去」も理解する必要がある。ライフストーリーは語り手の過去と現在を理解する方法の1つなのである。

以下に分析方法を段階的に述べる。

1) ライフストーリーの構成

本研究におけるインタビューでは、①同胞として生まれ育って成人するまでの、同胞の思い出として残っている出来事、②同胞が発病し、ドナーになった体験について、そのときの気持ち、③ドナーとなってからの同胞とその他の家族成員との関係性や気持ちの変化、についての自由な語りを参加者に促し、逐語録とした。

逐語録からライフストーリーを構成する。出来事や行為の展開過程といった語りの筋に注目し、分節化、小見出しをつける。その際、語られた文脈の意味を崩さぬよう、語り手の言葉を可能な限りそのまま記述した。

2) ライフストーリーの解釈

構成されたライフストーリーは小見出しが付けられた複数のストーリーに分割されているが、それらを独立に分析するのではなく、ストーリー間のつながり、全体的な文脈を考慮した解釈を行う。

家族システム理論を解釈の理論的支柱とし、ある家族成員の問題が家族システム全体に影響を与えた事やそれに対する家族の対処を語っている部分に注目した。また、過去の心境を思い出して語っているのか、現在の過去に対する心境を語っているのか、ある出来事を語り手自身がどう意

味づけているのかなどにも注目して考察を行った。特に、語りが重複するところや、矛盾した語り、言葉を濁す部分や、強調する部分は語りの本質を理解する上で重要である。

解釈は次のような段階のプロセスを踏んだ。

- (1) ストーリーライン（あらすじ）を構成した。
- (2) 構成されたライフストーリーから同胞ドナーとして特徴のある語りを抽出、解釈し、テーマを付けた。本研究における同胞ドナーゆえの心境とは、同胞ドナー特有の経験、同胞間移植の影響が家族に及んでいることが明らかな部分、参加者本人が人生において重要であると考えている事柄等である。
- (3) 参加者全員のライフストーリーを全体の文脈として比較し、家族システム理論によって分析する。

2. 対象者

1) 対象者の基準

同胞の造血細胞移植ドナーとなり、患者と死別した成人とした。

2) 研究対象者の選定

対象者の選定には、造血細胞移植実施医療機関からの紹介、知人からの紹介の2つの方法を取った。どちらの場合にも紹介者は本研究に関係していないこと、研究参加の有無は紹介者に知らされない事や研究の詳細（研究目的、方法、被る利益と不利益）が書かれた文書を紹介者から対象者へ送付し、研究者へ面会の意思を伝える返信を送った者を対象とした。

3. データ収集期間および方法

1) データ収集期間

2014年2月～2014年11月

2) データ収集方法

データ収集はインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。インタビュー内容は参加者の理解が得られた場合はICレコーダーに録音し、速やかに逐語録として記録し、対象者や登場人物の匿名化を行った。

4. 分析の信頼性

データ収集から分析の全過程を通し質的研究の見識者からスーパーバイズを受け、家族看護研究の専門家、造血細胞移植看護の専門家と検討を繰り返した。

倫理的配慮

本研究は、東海大学倫理委員会および日本医科大学付属病院倫理委員会の承認を得て行った。研究の詳細（研究目的、方法、被る利益と不利益）について口頭と文書にて説

Table 1. participant characteristics

	donor A	donor B	donor C
sex	male	male	female
age of the time of harvest	20s in years of age	30s in years of age	50s in years of age
age of the time of interview	30s in years of age	40s in years of age	60s in years of age
relation between patient and donor	elder sister-younger brother	elder brother-younger brother	The eldest sister-the youngest sister
age of patient	20s in years of age	30s in years of age	60s in years of age
method of harvest	peripheral stem cell harvest	bone-marrow harvest	bone-marrow harvest

明を行い、文書にて同意を得た。研究者は対象者に対して、参加は自由意志であり、不参加の場合でも、一切の不利益は被らないこと、プライバシーの保護および匿名性の確保を行った。

結果

研究参加者は3名であった。Table 1に3名の基礎情報、Table 2に3名のストーリーライン、以下に3名の同胞ドナーとして特徴のある語りを記述する。表記方法として、逐語録からの引用部分はゴシック書体で示し、分かりにくい部分は（ ）で言葉を補った。

1. A氏の同胞ドナーとして特徴のある語り

姉は子どもの頃から優秀で、A氏は姉をライバル視しながらも憧れていた。姉の病気や移植は、20年間変わらなかった同胞関係に影響を与えた。A氏はHLA型の適合を聞き、ヒーローになれる挑戦権を得た、つまり家族内で注目される機会を得たと感じた。自分が姉の命を救える可能性を持っている点で、姉よりも上の立場にある事をA氏は示そうとした。A氏が姉に、「助けてやる」という態度をとった事は、姉に弟上位の上下関係を意識させた。「あんたに助けてもらう筋合いがない、調子に乗るな」と、姉は反発し、過呼吸になる程の姉弟喧嘩となった。姉弟に上下関係が意識され、喧嘩になった事は、両親にも影響を与えた。母は、姉が過呼吸になったと聞き、「姉弟2人に何やらせてんだ、自分が提供しなかった」と涙した。

A氏は、移植直後に姉が亡くなった事について、「なんとなく尾を引いたところもあるし、(造血細胞が)届いた安堵感もあった、姉弟の中でのプレゼントが届いた、挫折だけ」と話している。

姉の死後、父の性格は前が思い出せない程に変わり、母は10年経った今も姉の部屋をそのままに掃除を続ける。そんな両親をみて、「今は一人っ子になっちゃったっていう感覚。一人になった時、親はもう自分が見ていくしかないんだと感じた。」と話す。しかし、親が深い感情を話そうと

すると聞かないようにし、それゆえ通じ合えない親との関係から、親への思いは片思いであり、自分は孤独病であると話す。

2. B氏の同胞ドナーとして特徴のある語り

B氏にとって、兄とHLA型が一致した事の意味は、時間の経過と共に変化する。

「(HLA型の)検査する時からもう、合ったらやろうと思って、合ってたってわかった瞬間にもうこれはやるべきしかない」と語る。移植前のB氏にとって、HLA型の一致は、“兄を救える可能性”という意味があった。

B氏は、自分の細胞の努力が足りないせいで兄を救えなかった、採取までの期間に「もっといい細胞にできたんじゃないか」と語る。B氏はHLA型が「合わなければ何もできなかったからさらに悔しいのかもしれない」が、できることがあったドナーとしての後悔を経験していた。兄の死後、HLA型の一致は“チャンスがあったのに活かできなかった後悔”という意味となった。

父の妹が白血病で亡くなっている事、HLA型が一致した事は、“一瞬、一歩間違えば僕だったかもしれない”という認識をB氏にもたらし「助けられなかった」という気持ちを強めた。B氏は、「兄の分まで自分がB家を支える」と考えるようになる。この責任感は、10年経ってもB氏が健康診断時に白血球の数値を気にかけ、大丈夫だったことを親に伝えるという行動に繋がっている。

そして現在、子どもが生まれたB氏家族はわが子が白血病になるかもしれない不安を共有している。HLA型の一致は、“わが子にまで白血病の可能性をもたらす血の繋がり”という意味になった。それは、子どもを救う可能性を増やすため、子どもは多い方が良く、出産時に臍帯血を保存するという家族の選択、行動に繋がっている。

このように、HLA型が一致したという10年前の事実は、B氏の行動、わが子の人数にまで影響を与えていた。

3. C氏の同胞ドナーとして特徴のある語り

C氏は、4姉妹の仲の良さについて何度も語った。4姉妹

Table 2. Participant story line

	A 氏	B 氏	C 氏 (C 氏は 4 姉妹の四女であるため、姉を上から長女、次女、三女と記述する。)
患者の 発病前	A 氏は全寮制の高校に進学し、高校生の頃から姉と離れて暮らした。	B 氏と兄は子どもの頃からとても仲が良く、B 氏が結婚するまで実家で一緒に暮らしていた。	C 氏は長女と 11 歳年が離れており、「(子供の頃は)あんまり会った記憶がない」と話す。4 姉妹それぞれに子どもの手が離れた 40 歳代頃から交流が始まる。4 姉妹で年に 2 回の旅行に行き、子どもが遠方にいても気にならない程の「4 姉妹の結束」を深めていく。
患者の 発病後	姉は、20 歳代前半の頃に白血病を発病する。突然に姉の発病を聞いた A 氏はすぐに、自分の HLA 型を検査してくれと頼んだ。以前より 1 年間の留学に行く事が決まっていた A 氏は、検査後すぐに留学へ発つ。A 氏は留学先で、HLA 型が適合していた事を母の手紙で知る。留学先では、 <u>ソトに来てしまった感覚を持ちながら、母の手紙で知るウチの状況に「何をやっているんだ」と感じる。留学から帰るときには、A 氏の採取入院の手続きは終わっており、帰国するという事は提供するという事というお膳立てができていた。</u>	B 氏が 20 歳代後半の頃、兄は白血病になる。兄は移植をしなければ 1 年持たない状態となった。B 氏は「僕はもう全然迷わずやります」と医師に伝えた。B 氏と両親は「そもそも移植を選択しない選択肢はない」と話し合っていた。B 氏は父の妹が白血病で亡くなっていること、白血病は遺伝の可能性があると思っていることを語った。つまり、自分が(白血病に)なっているにもかかわらず、逆の立場なら兄もドナーになってくれていたと考えた。B 氏は「 <u>造血細胞移植する前日、兄がおまえじゃなくてよかった</u> 」と話した事を語った。	長女は、60 歳頃に悪性リンパ腫を発病し、一度は寛解したが、再発する。長女の病気は再発した時にはもう、移植をしても確率がすごく低いって言われてたし、ホスピスとか言われるほど悪い状態だったが、長女の希望で移植をする。C 氏は、 <u>姉がやりたいって言ったらもう断る理由はないと自分も後悔しないためにドナーの決断をする。長女の入院中、次女と三女は毎日、長女の病院を訪れていた。次女や三女と違い、遠方に住んでいた C 氏は、長女の見舞いに頻繁に行けないことから、ドナーの役割が私でよかったと、語った C 氏はお金に関してうやむやにしない、いいよとか言わないで C 氏に長女にちゃんと採取にかかる交通費等のお金を払ってもらった。それは、C 氏にとっての長女への気遣いであった。</u>
死別後	A 氏は、移植直後に姉が亡くなった事について、「なんとなく尾を引いたところもあるし、 <u>(造血細胞が)届いた安堵感もあった、きょうだいの中でのプレゼントが届いた、挫折だけど</u> 」と話している。姉の死後、父の性格は前が思い出せない程に変わり、短気だった性格が思慮深くなった。母は、10 年経った今も姉の部屋をそのままに掃除を続ける。そんな両親をみて、「 <u>今は一人っ子になっちゃったっていう感覚。一人になった時、親はもう自分が見ていくしかないんだと感じた。</u> 」と話す。しかし、親が深い感情を話そうとすると聞かないようにしており、それゆえ通じ合えない親との関係から、親への思いは片思いであり、自分は <u>孤独病</u> であると話す。	兄の死後、兄がいない以上、B の家を僕がなんとかしないと、(自分の)新婚生活よりもまず B の家を建て直そうと考えた。B 氏は次男であり、兄が病気になるまでは、自分は家を建てていくつもりだったが、兄の死後は 1 か月に 1 回必ず実家に帰る程、気持ちが実家の方を向いていた。B 氏は、 <u>兄貴の事を考えると自分が生かされているからその分も生きなきゃいけないと考えた。</u> 現在は、移植した事も全く後悔してないが、最初は「 <u>自分が兄貴を救えなかった</u> 」と感じていた。「同じきょうだいで、一瞬、一歩間違えば僕だったかもしれない、自分が助けられなかったっていう気持ちが強かった」と語る。ドナーとして兄を救えなかった後悔と、弟として兄の死を悲しむ感情が同時にあることを語った。B 氏は、血液の中身の構成が僕と兄は一緒であると話し、わが子が白血病になる不安があり、それは家族で共有される不安であった。「 <u>子どもを自分と同じ環境にするわけにいかない</u> 」と語る。	C 氏はドナーの意思決定以前に、次女、三女と共に姉の「死」の可能性を医師から告げられていた。 長女の死について、「 <u>4 姉妹であっち行ったりこっち行ったり、どっただけ行ったかって。姉がいたらそれが楽しく続いていたのに</u> 」と語る。長女の死後、次女が「 <u>姉(長女)そっくりになっ</u> てきて」長女の役割をし始めた。今は、同じお墓に入った両親と長女のお墓参りを理由に、3 姉妹がお墓で待ち合わせをして、一緒に食事をすることを楽しみにしている。

表現方法として、逐語録からの引用部分は下線で示した。

がそれぞれに役割をとる関係性において、C 氏がドナーの役割をとる事が自然な形であるように語りを構成した。さらに、4 姉妹の関係性を変えないために、提供過程において長女から気を使われるという対処をとった。「やっぱあげる人ともう人みたいになっちゃうと、上下関係できちゃうとね」と話す。

C 氏は、元々 4 姉妹が持っていた価値観に沿ってドナーという経験を終えることで、C 氏にとって大切な姉妹の関係性を変えることなく移植を終えた。

考察

本研究では、患者と死別した同胞ドナー3名にインタビューを行った。以下に同胞ドナーの語りから解釈した同胞間移植が与える家族への影響、その後の対処について考察する。

1. 同胞ドナーは提供に命を救う以外の意味を強く意識する

A氏が移植に「プレゼント」という比喻を用いた事にはどのような意味があるのか。細胞の提供が身体の一部を渡す物理的な意味だけでなく、A氏の思いがこもった贈り物が姉に届くという対人関係における意味を付加すると考えられる。山崎¹⁷⁾は、「取り出された身体の一部は、実際には人間の一部分であることをやめて、モノや商品として扱う事も可能である。しかしそこには、モノとは異なる属性が繰り返し読み込まれる。」と述べている。つまり移植において、ドナーの人間性とドナーから取り出されたモノを別のもんとして取り扱うかどうか議論となり得るのである。A氏がプレゼントという語彙を用いた事には、まさしくA氏の人間性とモノを同一視しようとする思いが窺える。さらに、患者の命を救うという目的が達成されなかったため、ドナーはそのような意味を、今なお強く意識し続けている。

骨髄バンクドナーも「プレゼント」という意味を意識していることが推察されるが、同胞間移植では患者とドナーが関わり合う。医療者は、患者の命を救うためにドナーになる選択肢を同胞に説明する。しかし、ドナー役割が身体の一部をモノとして提供する以上に、互いの関係性や個人の心理に影響を与えていた。B氏は、HLA型が兄と一致したことを10年後も意識し続けている。医療者が行った説明が、患者の死後も影響を与えている事実を知り、同胞ドナーを身体的にだけでなく、精神的にフォローアップし続けていく必要がある事が示唆された。

2. ドナー役割の失敗は他の家族役割で補う

A氏とB氏は移植時に両親が健在であり、逆縁の不幸を悲しむ親の姿を見ることになった。同胞は年齢を重ねてから、親の扶養・介護、あるいは葬祭を行うにあたっての重要な役割を分担し合う¹⁸⁾。A氏とB氏は長子が亡くなり、「親は自分が見ていくしかない」と語る。B氏は「ドナーの役割に失敗し、兄を救えなかった自分だからこそ、兄の分まで親を支える」と語っている。

一般に、家族のサブシステムとして役割を分担している同胞の一人が死亡した場合、残された同胞の家族役割は変化する。特に、患者と死別したドナーは患者が担っていた役割そのものを引き受けることに、強い責任を感じてい

た。その背景にあるのは患者を救えなかった経験を「失敗」と意味づけ、これを補いたいという思いである。

C氏は長女の予後が不良であることを医師から告げられていた。医師からの説明を他の家族成員と共に、ドナーの意思決定より前に聞いていたことは、C氏に責任を感じさせない結果となった。

3. 同胞間移植について語り合う家族、語り合わない家族

移植のために、同胞のHLA型を検査する事は、家族に「血縁」を改めて意識させる出来事となる¹¹⁾。そのような人生の転機を語る事は、その経験を家族の歴史的一幕、つまりストーリーとして再構成する事である。人は過去を語り直す事で、過去の出来事を客観視する事が出来る。

B氏は、兄の死や移植、遺伝の可能性について家族で話し合ってきた。B氏の経験はストーリーとして語り直されていく事になり、HLA型の一致に対するB氏の意味づけも時間と共に変化していった。C氏は長女の死後に3姉妹でお墓参りに行くことで、姉妹関係を変化させながら喪の作業を共有した。

A氏は、親が深い感情を話そうとすると聞かないようにしており、家族で姉の事を語り合う事はなく、家族内で移植の経験が語り直される事はなかった。

人が経験を語り直すには、語り相手が必要となる。ドナーや家族が語りたと思った時に語れる場所があることは移植という人生の転機を振り返り、その意味づけを変える機会となる。語り合う家族、語り合わない家族がいる事を理解し、ドナーや家族が語りたと思った時に受け入れる場が必要である。

研究の限界

本研究の参加者は自発的に研究参加の意思を表明した者であり、得られたデータに偏りがある可能性がある。また、参加者が3名とも長子に提供していることから同胞ドナーの特徴が十分に記述できたとは言えない。

今回の研究は個々の事例における本来の家族の境界、患者が発病する以前の基本構成要素、抱えている潜在的な葛藤などの部分的な記述に留まり、有効な介入に向けての記述としては未だ不十分である。

また、分析には家族システム理論を用いたが、本来その枠組みには第三者である聞き手が家族に与える影響も含まれる。今回の研究で得られた知見を踏まえ、我が国の現状に即した家族への介入方法を開発する事が今後の課題である。

謝辞

本研究ご協力いただいた参加者の方々に深謝する。そして、参加者の紹介に際してご尽力を下さった日本医科大学付属病院の田村秀人医師に深謝する。また、本研究にご助言下さった、東海大学の前田泰樹先生に深謝する。

著者役割

研究計画, データ集積, データの分析, 論文執筆は浅野悠佳が行った。研究計画への助言, 分析結果, 論文内容に関する解釈と助言を柳原清子が行った。

利益相反の開示

本論文発表内容に関連して特に申告なし。

文献

- 加藤俊一. わが国における造血細胞移植の現状と展望. 黒川峰夫編. 造血幹細胞移植の最新動向. 東京, 医歯薬出版株式会社; 2013; 11-21.
- 西川拓朗, 河野嘉文. 同種造血細胞移植の提供者となったきょうだいへの対応・支援—医師の役割を含めて—. 小児看護. 2009; **32**: 1364-1369.
- 野村佳代, 村田恵子. 家族看護 病児の同胞に対するケア. 小児看護. 2002; **25**: 484-489.
- 田邊美佐子, 吉田久美子, 黒澤やよい, 神田清子. 小児期に骨髄ドナーになったきょうだいの経験. 北関東医学. 2010; **60**: 25-30.
- 土田昌宏. ドナーの権利擁護と安全確保. 日本移植学会誌『移植』. 2004; **39**: 41-45.
- Cheryl Rodgers, Anne Young, Brenda Binder. The Meaning of Adolescents' Eating Experiences During Bone Marrow Transplant Recovery. *Journal of Pediatric Oncology Nursing*. 2013; **27**: 65-72.
- 吉田恵実子, 中村恒子, 安達一世, ほか. 小児造血幹細胞移植ドナー候補となるきょうだいのケア. こども医療センター医学誌. 2009; **38**: 222-226.
- Erika Arantes de Oliveira-Cardoso. Bone Marrow Donation from the Perspective of Sibling Donors. *Latino-Am, Enfermagem*. 2010; **18**: 911-918.
- 山花令子. 造血細胞移植における倫理的課題. がん看護. 2012; **17**: 372-374.
- 福田真己, 澤田愛子. 成人末梢血幹細胞移植の動法ドナーの提供体験における心理社会的問題と看護的支援. 日本看護研究学会雑誌. 2007; **30**: 119.
- 三枝真理. 造血細胞移植における既婚同胞ドナー特有の困難性の分析. 東海大学大学院健康科学研究科看護学専攻, 平成23年度修士論文 (2012)
- 加藤俊一. 厚生労働科学研究成果データベース. 平成16年度, 2004; (<https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD00.do?resrchNum=200400072A>) Accessed 2019 February 3.
- 日本造血細胞移植学会. 日本における造血細胞移植. 平成29年度全国調査報告書. 日本造血細胞移植データセンター. 平成29年度版, 2017; (<http://www.jdchct.or.jp/data/report/2017/3-3-1.pdf>) Accessed 2019 February 3.
- 鈴木和子, 渡辺裕子. 家族看護学: 理論と実践. 第4版. 東京, 日本看護協会出版会. 2012, 28-30
- 桜井厚. ライフストーリー論. 東京, 弘文堂, 2012, 6
- Patricia Benner, Judith Wrubel. The Primacy of Caring Stress and Coping in Health and Illness, Addison-Wesley Publishing Company. 難波卓志 (訳): 現象学的人間論と看護. 東京, 医学書院. 1999; 146.
- 山崎吾郎. 臓器提供に現れる身体と人格: 生経済における贈与論のために. 2011; **76**: 308-329.
- 西野理子. 時代の中の家族. 藤見純子, 西野理子 (編). 現代日本人の家族. 有斐閣ブックス, 2009; 30.

Narratives of Donors Who Lost Their Siblings in Hematopoietic Stem Cell Transplantation

Yuka Asano¹, Kiyoko Yanagihara²

¹Nursing Department, Hiroshima University Hospital

²Faculty of Health Sciences, Institute of Medical, Pharmaceutical and Health Sciences, Kanazawa University

Abstract

This study illustrated the narrative personal stories of three sibling donors of hematopoietic stem-cell transplantation (HSCT). We recapitulated data from semi-structured interviews conducted by using the life-story method, and we analyzed psychological influences which the sibling donors had on their families in terms of the family system theory. Donor A (30s, male) donated to his sister with acute leukemia. Through the process of transplantation, donor A and his sister became aware of the power balance between them, which influenced to their parent's emotional attitude. Donor B (40s, male) donated to his brother with acute leukemia. The awareness of blood ties in turn raised his anxiety of the risk of leukemia in Donor B and his children. Donor C (60s, female), the youngest of 4 sisters, donated to her sister with malignant lymphoma. The strength of the emotional bond among the 4 sisters was maintained and reinforced even after the death of the patient. Collectively, these analyses suggest that sibling donor HSCT has an influence on the whole family relationships as well as those among the involved siblings, which warrants the need for sustainable family support before and after HSCT. (Journal of Hematopoietic Cell Transplantation 8 (2) : 90-96, 2019.)